



TITLE:

經濟學史上のベッカリア

AUTHOR(S):

小川, 福太郎

---

CITATION:

小川, 福太郎. 經濟學史上のベッカリア. 經濟論叢 1923, 17(3): 448-452

ISSUE DATE:

1923-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128061>

RIGHT:

# 京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第七十卷 第三號

大正二十二年九月一日發行

## 論叢

間地稅の觀察點……………法學博士 神戸 正雄  
植民地の經濟政策に就きて……………法學博士 山本美越乃  
共產の原理……………法學士 恒藤 恭  
私經營統計概論……………法學博士 財部 靜治  
海運に於ける競爭と獨占との分界……………法學士 小島昌太郎

## 時論

農村問題と其對策……………法學博士 河田 嗣郎

## 說苑

シニワーへの法則……………經濟學士 岡崎 文規  
壹岐國に於ける地割制度……………農學士 奥田 彥

## 雜錄

百姓と町人……………法學士 本庄榮治郎  
獨逸に於ける勞働立法の發達……………經濟學士 中丸 叶  
經濟學史上のベッカリア……………經濟學士 小川福太郎

## 經濟學史上のベッカリア

小川 福太郎

—

有名なる伊太利の刑法學者ベッカリア（一七三八—一七九四）は、二十二ヶ國の言葉に翻譯されたといはれる其著「犯罪と刑罰」（*Dei delitti e delle pene*）によつて多く知られてゐる。然しながら彼は尙、經濟學上の問題にも興味を有し、

其著書には彼の故郷ミラノの貨幣制度に關して述べたもの等がある上に、一七六八年にはミラノに於て經濟學の講座を受持つに至つた（是は歐ける經濟學講座の第二番目のものである）そして其講義は、彼の死後、

一八〇四年に「經濟學要論」(Elementi di economia pubblica)として世に現はれる事となつた。

此書に於ける彼の推論は明確且つ嚴密であつて經濟學を以て、仕事の生産物の價值を最大ならしむるための一の技術の如く取扱ひ、工程を最大ならしむべき機關の如く、勞働者を看做し、此原則よりして、分業の必要、勞働者の價值の決定、資本の性質及び作用等を論じ、更に人口増加の食物との關係に於ける法則を説明してゐる。<sup>1)</sup>もとより是等の議論は必ずしも彼の獨創ばかりではないが、其の人口論の如き、又自由競争并に獨占の場合に於ける正常價値の法則の説明の如きは注目すべきものであるといはれてゐる。<sup>2)</sup>

## 二

然らば、ベツカリアは經濟學史上に於て如何

なる學派に屬するものであらうか。彼の時代は一方に於てはメルカンチリズムの餘焰の未だ消えない時であり、他方に於てはフイジオクラトが漸く新興の氣運に向へる時であつた。

彼の講義の原稿はもと、農業、工業、商業、租税、政府の項目に分れて居たが、後の二項は終に著書に現はれなかつたといふ事である。<sup>3)</sup>從つて其部分に關する彼の考へは知られないが、彼は農業を以て産業中、唯一の生産的のものとし、工業家や職人を不生産的(sterile)なる階級となし、一面内國産業の自由を鼓吹し、特權や獨占等に反對してゐる。是は幾分フイジオクラトの思想の影響を受けたものであらう。<sup>4)</sup>（彼は一年に巴里に旅行し、フイジオクラトと交遊した。）<sup>5)</sup>

彼は農業の改良を妨げる障害を研究し、其主なるものゝ一として農民の悲惨なる狀態を挙げ若し土地より一層多大の生産物を獲得し、從つて一般の幸福を一層大ならしめようとするならば、先づ第一に、農民の經濟狀態及び精神狀態を高めなければならぬといふ考へを持つてゐた

1) Palgrave, Dictionary of P. E. Vol. I. p. 127  
Léon Say, Nouveau Dictionnaire d' Economie politique Vol. I. p. 180  
Ingram, History of P. E. p. 71  
2) Cossa, Histoire des doctrines économiques. p. 291  
3) Cossa, Ibid.  
4) Pantalconi, On Beccaria (Palgrave, Ibid)

即ち彼は「政治家等は、農民が困窮して居り、壓迫されてゐる事が多い程、農民は休まずに働かうとするものであるといふ様な苦悶な論理を採用してゐた——勿論、人々はどんなにしても生きんと欲するものであるから、壓迫の下に於ても産業は發達するであらう。然し其効果たるや、緩慢であり又困難なものである、常に繁榮になつて行くといふ希望と勇氣によつて生ずる効果とは較ぶべきでない」と。そして彼は農民の教育程度を高める爲に、讀書、計算、簡明なる職業上の初歩的智識や倫理を教へる事をすゝめてゐる。尙、彼は農業の進歩を妨げる一原因として、土地所有權の分割の不充分である事を擧げてゐる、彼は絶對的に小農を勧めるのではないが、大地主が其社會的義務を盡さない事を攻撃してゐるのである。是等の意見は亦以て當時の伊太利の農業及び農民の狀態の一斑を窺はしむるに足るであらう。

かくの如く農業の發達を望んだ彼は、一面必ずしもメリカンテリスムの教ゆる所をすべて排

斥したのではなく、輸出獎勵金を辯護し、貿易政策に付ては大體、保護貿易論者であつたといはれてゐる。<sup>9)</sup>

由是觀之、ベツカリアの是等政策上の意見よりしては、彼が前述の二派の何れかに屬すると斷することは出来ない。寧ろ當時の他の論者と同じく兩派の折衷論を立てたものである。<sup>10)</sup>

### 三

ベツカリアの時代に於て價值論を研究した伊太利の學者には、ダヴァンツァチ (Davanzati) モンタナリ (Montanari) 等の如く、生産費なる要素を全然除外して價值を全く效用に依つて支配せられるものとして説くものと、ガリアニ (Galiani) ファブローニ (Fabroni) の如く、價值は生産費に基くと見るものとがあつたが、ベツカリアは此の中の後者に屬するものであると、ロリアは認めてゐるが、近頃ゼノア大學教授アリアシのいふところに據るとベツカリアはガリアニ及びヴェリー (Verri) と共に、十八世紀後半に於ける伊太利派と稱すべきものゝ最も有名なる代

4) Cossa, Ibid p. 292  
Pantaleoni, Ibid

5) (6) Ingram, Ibid.

7) Cossa, Ibid.

8) Gino Arias, L'école italienne d'économie politique au 18<sup>e</sup>. siècles.  
(Revue politique et parlementaire, Janvier 1923)

表者であつて、更に此派の先驅者としてはグヴァンツァチ、セラ(Serra)モンタナリがあり彼等は、主觀的價値の概念を明かにし、客觀的價値が前者に由來すると説くものであるといふ、そしてベツカリアはチユルゴと殆んど同時代に此の價値の重要問題を探究したのであつた。<sup>13)</sup>

#### 四

かのジェヴォンスによつて唱へられたところの「一定の時、一の市場に於ては、同質の貨物の同一量に對して、二つの價格は存在し得ない。」といふこと、即ち所謂「無差別の法則」は、既にベツカリアがチユルゴと同じく、ジェヴォンスに先つこと約一世紀以前に於て、述べてゐるところであるが、ベツカリアは更に其上に、運搬費が價格の一要素であるとし、「運搬は價値を有する勞働であつて、運搬するものは其勞苦を償はれることを望む。そして運搬費なるものは、慾求の等しい場合には相殺分割されるであらうが、其等しくない場合には常に慾望の一層強いものによつて支拂はれる、而して運搬費

の相異は慾望の相異と結び合はされなければならぬ。従つて此相異よりして、買手と賣手とは、彼等の相異なる慾求と貨物運搬の爲に經過したところの相異なる距離との複比に於て、彼等の貨物を多く又は少く與へるであらう」といつてゐる。次に、獨占并に競争の場合に於ける價格と生産費との關係に付ては、ベツカリアは、先づ獨占の場合に付て「或る仕事を企てんとする人は彼と同じ仕事を行はうとする競争者又は模倣者のない限り、買手の氣に入らぬだらうと虞れる限界に達する迄、買手をして自己の意に従はしめて、常に高い價格を維持する。」といふてゐるが尙、此點に關しては、ガリアニも亦「獨占されたる生産物の價格は、一の複比を成すところの買手の慾求と賣手の評價、とに、常に一致する。」といふ。第二に、競争の場合に付ては、ガリアニは單に、價格が正當なる標準に落付く傾向を有することを、明かにするに止まつてゐるが、ベツカリアは曰く「競争者の存する時には、最低の價格で仕事をするこの出來る者によつて左

9) Cossa, Ibid.  
Ingram, Ibid.

10) Achille Loria, Italian School of Economics (Palgrave, Ibid. Vol II p. 464)

11) Cossa, Ibid. p. 292.

12) Loria, Ibid p. 463

13) Gino Arias, Ibid.

右せられる、そして其最低價格の限界は、仕事の價值即ち、其仕事を仕上げるところの最少數の人々が最少時間内に消費する食料であらう<sup>13)</sup>と。

以上の外に、ベツカリアは、尙、かの「犯罪と刑罰」の中でも、或は其序文に「最大多數の最大幸福」といふ事を述べ、或は其他の箇所で人間の性質が絶對的に利己的であるとして立法の必要を説き<sup>14)</sup>又所有權に付て論及してゐる<sup>15)</sup>。是等も亦經濟學史に關係ある問題であらうと思ふ。

14) Pantaleoni, Ibid.

15) Léon Say, Dictionnaire, Ibid.